

## マスクは100年前から

日本におけるマスクの普及は、100年前に終息したインフルエンザの世界的流行（パンデミック）がきっかけとみられます。

この風邪は、大正7（1918）年の秋から大正10（1921）年の春まで断続的に続き、死者は全国で約38万8千人、道内では1万2千人余りが亡くなり、「スペインかぜ」の名前で知られています。

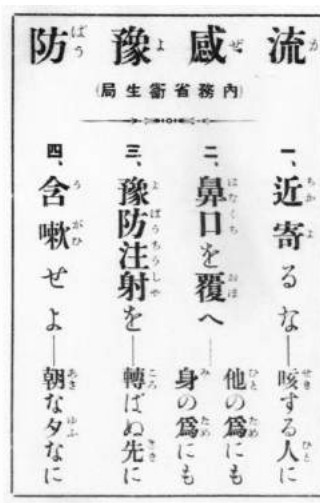
市内の状況は十分確認できていませんが、石狩小学校が臨時休業したという記録があるので、被害はあったと思われます。この風邪で厚田区の大実業家 佐藤松太郎氏が流行始めの大正7年11月に小樽市で亡くなっています。

大正11（1922）年、内務省衛生局がまとめた「流行性感冒」という報告書では、当時もマスク（呼吸保護器）、嗽（うがい）、不要な外出、今でいう「3密」を避ける、予防接種などが一般に呼びかけられています。下図は当時の啓発ポスターで、黒いマスクをした人々が描かれ、「恐るべしハヤリカゼのバイキン!」「マスクをかけぬ命知らず!」「マスクとうがひ（い）」と書かれています。マスクの需要が高まり、高値を呼びました。各地の裁縫学校や女学校などでマスクを製作させ、一般に原価で提供して収まったという話もあります。



注 図3点は国立国会図書館デジタルアーカイブ内務省衛生局編「流行性感冒」（1922）より転載

ちなみに江戸時代にも計26回の風邪の大流行があり、このうち14回がパンデミックとなり、長崎県經由で入ってきたと考えられます。石狩市付近でも文政10（1827）年に風邪の大流行があり、石狩場所（石狩川流域の交易地）の人口が半分になったそうです。この風邪は当時江戸で「津軽風」と呼ばれたものと同じだと推定されます。（石橋孝夫）



石狩市学芸協力員  
石橋孝夫 Takao Ishibashi

専門分野は考古学と石狩史。石狩紅葉山49号遺跡の発掘を手がけたほか、縄文時代から江戸時代に至るサケ漁の方法や文化について研究する。